

「大学で教える人のためのルーブリック入門」

佐藤 浩章 氏（大阪大学 教育学習支援センター副センター長）

私からは、ルーブリックの話を基礎編からさせていただこうと思っております。ライティングの専門家ではございませんので、教育学の立場から少し広い話のところからいきたいと思います。まず、このお話にはネタ本がございます。『Introduction to Rubrics』というポートランド州立大学の Dannelle Stevens 先生が書かれた本です。私の、かつての指導教員の1人だったのですが、大変素晴らしい内容なので、昨年、訳させていただきました。今日の話のかなりの部分はここに集約されておりますので、関心を持たれたら、ぜひ、またこちらの本をお読みいただければと思います。

今日の内容ですが、基礎的なところから始めまして、さまざまな種類のルーブリックを紹介し、それから、なぜルーブリックを使うのかという意義を皆さんにはご理解いただきたいと思います。いろんな人が使うことができるツールですので、教員以外にも使えますよという話、使用上の留意点等についてもご説明したいと思います。

まず、ルーブリックとは何かということをしっかりとご理解いただきたいと思います。メリットと留意点を説明できるようにしていただきたい。これは学内で同僚の方たちに広めていく上では、どうしても話さなくてはいけないことですよね。なんで、そんなのわざわざ使うの、あるいは、使ってみたけど全然効果が出ない、ということを言われないうちに、今日お越しになってる方たちが説明できるようにしていただきたいと思います。

ルーブリックとは何か。まず現物を見てください。こういう表形式になっているというのがポイントなのです。求められる能力というのが具体的に書かれています。採点するときどうしたらいいかというと、このように丸を付けて、そのまま返してあげる。これを今まで皆さん、赤ペン先生のように一枚一枚やっていたわけです。同じことを何度も、何度も繰り返していたわけですが、もう既に書いてあるんです。なので、そこに丸を付けるだけでいい。場合によっては付け足していただいても結構ですけれども、かなり時間の削減になるのではないかと思います。

もともとはいわゆるセンター試験のような客観テスト、多種選択のテストに対して、ああいう評価の仕方では限界がある、学生の本物の力を測定できないのではないかという問い直しからルーブリックが生まれています。ライティングのような高度な能力に対してあのような評価はあまり向いてないということはお分かりだと思います。それから、長期間にわたって書かせる卒論とか、修士論文なんていうのは、何度も振り返りをさせて、プロセスも評価したいということになるわけですね。これも、今までの客観テストではなかなかできなかったことです。朱書きの先生のコメントこそ、プロセス評価だと思いますけど、非常に手間が掛かります。

今、評価側のメリットとして時間の削減になるとか、効率がいいというお話をしましたけれど、結果として何が起きてるかということ、レポートを書く上で一番重要なことを事前

に学生に伝えると、学生もやはりいい点数取りたいですから、このルーブリックを見ることによって学習行動を変えてきます。そして、先生も評価の観点クリアになり教え方を変えてくる。お互いに歩み寄ることによって学生自身が目標に到達しやすくなる。それが本質だと思います。なので、私自身はそういうセミナーの副題に、時短になりますよとか、先生が楽になりますよということで集客しますけれども、実は、そこが本質ではないとご理解いただければと思います。

さて、ルーブリックは、四つの要素から構成されているといわれております。

最初は「課題」です。これ、結構抜け落ちていらっしゃる方がいるのですが、表の一番上に、今まで皆さんが黒板とか、シラバスに書いていた、何文字でこのテーマについて書きなさいというものを書きます。なぜ、これをわざわざ入れるかというと、あっちいたり、こっちいたりしなくていいからです。先生が、何字指定でやっていたんだろう、締め切りはいつだったっけとか、別なものをいたりきいたりしていると時間の無駄になります。ルーブリックはできれば、A4、1枚、A3、1枚とコンパクトにしたほうがいいと思います。

二番目が「観点」です。これは、表の左側の所、縦に並んでいる所です。今回は五つの観点が書かれております。最初の三つの観点は25、25、25という配分、その次が15と重み付けができます。学生はやっぱり数字に目がいきますから、このレポートでは何が大事なのかということをここで伝えることができるわけです。

三番目が「評価の尺度」です。今回は物差しの目盛りは三つで設定してあります。これは、三つ、四つ、五つあるいは12とか、増やすこともできますけれども、増やせば増やすほど、先生も作るのが大変になってきます。

最後が、この四角の表の中身、「評価基準」というふうに呼んでおまして、具体的にどんなスキルなのか、どんなパフォーマンスが求められるのかということの一つ一つ記述していきます。これはちょっと作るのが大変ですね。

先ほど、ご紹介されていたのは、ここで言うところの「課題ルーブリック」ということになります。レポートとか、あるいはプレゼンですとか、実験、実習だとか、そういうときによく使われます。それ以外にも、「科目ルーブリック」、「カリキュラム・ルーブリック」というものがあります。もしかしたら、あまり関心のない人もいるかもしれませんが、こんなルーブリックもあるんだというところからお聞きいただければと思います。課題ルーブリックは飛ばします。

科目ルーブリックというのは、レポート一つではなくて、皆さんの教えている、いわゆるライティングならライティングだとか、英語なら英語という授業全体のルーブリックになります。左側に並んでいるのは授業の到達目標です。今回は七つの到達目標があり、それごとの優・良・可・不可と、皆さんご存じの、要するに成績を付ける尺度でもってルーブリックを作っていきます。なので、これに秀が加わると、これは5段階で作るといいと思います。学生さんに、「なんで、私、不可なんですか」と言われたときに、このルーブリックを見せればいいわけです。あなたはこういう能力ですよ、可以外にも良が一つぐらい

あるけれども、基本的には可が多かったので、あなたは可ですよ、という説明責任を果たすという意味で、このルーブリックはできております。

これは、実はあまりアメリカでは見ないルーブリックで、日本人特有のというか、細かく質保証しようという流れの中で、誰かが考え付いたんだと思います。日本高専協会が、全国の高専の全部の授業でこれを作るようにと言っているようです。これは高専だからできるんだろうなと思ってたんですけど、九州大学さんもこれを全学的に取り入れるということでした。

そして、最近、こちらのほうはアメリカでもよく見ます、カリキュラム評価です。ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー、三つのポリシーでやるという話がありましたよね。皆さん、もう既に学部、学科で取り組まれていると思います。今度、四つ目のポリシーが出そうです。それがアセスメントポリシーです。ディプロマポリシー設定したのは分かりましたが、どう評価するんですかと、必ず問われるようになります。そのときに、あったら便利なルーブリックです。学生さんに、自分たちの学科の学び4年間を通して、自分はちゃんと到達目標のディプロマポリシーに到達したのかどうかということをチェックするためのツールですね。

これはアメリカの例ですけれども、日本でかなりいち早く取り入れたのが関西国際大学さんで、学修ベンチマークっていうのを作っております。これはダウンロードできますので、ぜひ、サイトにいってご覧いただくといいと思います。特徴は、4、3、2、1と4レベルで作ってます。場合によっては、学期ごとの面談などのときにこれを使って、学生さんに自己評価をさせる、そして、先生側の他者評価を組み合わせ、より客観的な評価をするということもできます。

ルーブリックの関係としては、一番マイクロであるルーブリックは「課題ルーブリック」です。レポートとか、そういうものですね。それが幾つか組み合わさって「科目ルーブリック」になります。だから、「科目のルーブリック」っていうのは、どうしてもちょっと抽象度が高くなります。中身がよく分からないということになりますので、これは「科目ルーブリック」と「課題ルーブリック」を組み合わせ、使っていく必要があろうかと思えます。

こうした複数のルーブリックが学内に存在する際に、大事なものは、それぞれの目標が一貫しているということです。もし、全学レベルで学生が多様な読者に対して、文章によって効果的なコミュニケーションをとることができるという目標を設定したとすれば、経営学部だったら、経営学専攻の学生はビジネス書式を使って効果的にコミュニケーションをとることができる。そして、皆さんの授業レベルになると、財政学の授業終了時にはファイナンスレポートが書ける、ここまで持っていく必要があります。こうなると、徹底して教育の質保証がなされていますねと外部評価で高評価をもらえます、という話です。恐らく、今は皆さん、草の根レベルで課題ルーブリックから始められていると思いますが、こういう縦の調整、一つ一つ合わせていくというのが、そのうち必要になってくるかと思

ます。

さて、ルーブリックの段階、尺度の話をしたいと思います。一般的には3から5段階ルーブリックというものを推奨しております。特に、初めて作られる方は3から作るといいです。当然、段階が増えれば増えるほど、作るのは大変になります。差を付けにくくなるわけですね。2と3の違いは何かだとか、4と5の違いは何かとか、大変になってまいります。

作るときは、過去に存在した学生、これは出来のいい学生からあまり出来の良くなかった学生、皆さんが教えている学生をイメージして作るのが一番いいと思います。もちろん、日本でも少しずつ、ウェブでダウンロードできるものも流通していますが、一番使い勝手がいいのは目の前の学生を想定したもの、同じ大学、同じ学部の先生と一緒にワイワイ言いながら作るといいのではないかと思います。

3段階の場合は優・良・可・不可とかですね。秀・優・良・可・不可って、こういうふうに最初、不可っていうふうに書くのが一般的です。先生によっては、一番下のレベルも、何々できないというふうに書きたくないって言うかたもいます。私の学生は、一番下の所に丸が付いて何々ができないと言ったら、もうその時点でやる気をなくすので、最初から何々ができるっていうふうに褒めてあげたいと言う先生もいます。となると、優・良・可で一番下のレベルを可にしてあげると。

それは、どちらでもいいと思うのですが、大事なことは、この評価も他の評価もそうですけれども、受け取った学生が、次また頑張ろうとか、次の学習の動機付けにならなきゃいけないですよね。もうやめようとか、だから論文なんか書くの嫌なんだ、みたいな気持ちになってしまうといけないので、その辺りは皆さんの教育の方針だと思いますが、お考えになられるといいかなと思います。

例えば、尺度を表す表も、日本人の先生のルーブリックは、例えば、模範的・優秀・合格圏・不合格と、こんなふうに作ったりします。ですが、皆さんご自身がルーブリック受け取る立場になって、「Unacceptable」という欄に丸がついていると、どういう気持ちになります？ やっぱ嫌な感じですよね。もう二度と書くかみたいな話になるかもしれません。

なので、アメリカの人たちがよく考えたなと思いますけれど、一番上の列なんか見ますと、すごく気遣ってるでしょう。「not yet competent」、もう少し考えれば優秀だけどねとか。最後の一番優秀なら、「Sophisticated」とか、素晴らしい褒め言葉を使っているわけです。要するに、これ自体が学生に面と向かって何と言うか、その言葉をここに載せてあげるといいと思います。いろんなワークショップをやると、日本人の先生もいろいろ考えていて、最低の尺度に「伸びしろ十分」と書いている先生がいました。あ、いいなと思いましたね。要するに、皆さんが対面で学生さんにこのメッセージを伝えと思って、気持ちを込めて書いてあげていただきたいということです。

次に、採点指針ルーブリックというのがあります。分かりやすく言うと、1段階しかな

いルーブリックです。現物見ていただいたほうが早いですが、これは書評のルーブリックです。1個しかないですね。「チェックリスト」と呼んでいる人もいます。先ほどに比べると何が違うかっていうと、コメント欄に皆さんが書く量が増えます。じゃあ、あんまり今までの赤ペン先生と変わらないのではないかと思う人もいるかもしれませんが、それでもやっぱり、こういった指針があるかないだけで随分違ってきます。皆さんがたの負荷、学生の負荷というものを考えたときに、随分違うのではないかと思います。

このルーブリックは他にも幾つか特徴あります。観点の所で、1週、2週、4週、8週というふうに時系列で書いていますね。長期にわたってライティングをさせたい場合には、1週目にここまで、2週目でここまでという、今まであれば、この上の課題だけしか出してなかったところを、スモールステップで区切っているというところがポイントです。学生が、自分で今、何をしなきゃいけないのか非常にクリアに分かるということです。

それから、真ん中にチェックボックスが並んでいます。そうすると、大ざっぱに真ん中に丸付けてもいいのですが、チェックが入ってない所はまだできてないということで、かなり細かいメッセージを学生一人一人に与えることができます。しかも短時間で。従って、チェックボックスというのと時系列を入れているというのが、このルーブリックの特徴になると思います。

どんなときにこの1段階ルーブリックを使うか。例えば、博士論文の指導のときに、3段階ルーブリックに丸がついて戻ってくるだけだと、「もうちょっとちゃんと朱を入れてほしいな」と学生は思うわけですよ。だから、学年が上になればなるほど、こういった1段階ルーブリックというものを使うといいと思います。やはり、3段階、5段階ルーブリックはかなり事細かく求められるパフォーマンスを書いていますので、大学1年生などはいいですけども。評価の原則というのは、どんどん間引きしていかなきゃいけない。いつまでたっても、大学生院生に対しても5段階ルーブリックとか、12段階ルーブリックとかを使っているとどうなるかという、自分で評価できなくなりますね。常に、先生、見てください、先生、評価してくださいということになるので、間引いて最終的には1段階。卒業の段階では、もうルーブリックなどなくても、自分で論文を書けるようにしないといけないですね。

なぜルーブリックを使うんだろうとか、どんなメリットがあるのかという話をしたいと思います。大事な点は「評価がぶれない」。これは1人の先生の中でもぶれませんし、複数で評価してもぶれないと書いていますが、正確には「ぶれにくい」と言ったほうがいいと思います。これがあればすぐ、統一した評価が完全にできるかというと、そうではありませんのでね。

それから、「時短」になるということ。

また、「判読可能で意味のある詳細なフィードバックをタイミングよく与えることができる」と書いています。現実には、この逆が行われているわけです。皆さんがたが、一生懸命に100枚のレポートを赤ペンで採点します。結果として、判読不可能で意味のない、非常

に抽象度の高いフィードバックがタイミング悪く与えられているというのが現実です。

まず、皆さんの書いている文字、読めないという学生さんがたくさんいます。皆さん、時間のない中で走り書きをしますから、読めないわけですよ。あと、ジェネレーションギャップとかもありますね。それから、Good!とか、Excellent!っていうのは意味がないですね。何がGoodで、何がBadだったか書いてあげないといけない。特にできている学生に対してのフィードバックが弱い。できない学生には、「ここができてない」と書くじゃないですか。できている学生さんにちゃんと書いてあげなくては、成功を繰り返せないですよ。

それから、タイミングが悪い。いろいろ聞いてみると、北米圏では2週間以内のルールというのがかなりの大学で一般的です。2週間越して戻しても意味がないですよ、忘れちゃっているわけですよ。一番いいのは即時フィードバックですから、書いて提出した瞬間に戻ってくればいいのですけれど、それはなかなか難しい。ということで、われわれはフィードバックの時間を、これまで1カ月後とか、場合によっては返ってこないレポートというのが、私も学生時代よくありましたけれども、これはもう最悪ですね。返さなかったら、ライティングっていうのは意味がないわけです。それを可能にしてくれるのがルーブリックだということです。

でも、先ほども言いましたように、こういう先生がたのメリットというよりも、下にも赤字で書きました。「本当に大切なことを学生に伝えることのできる濃密なコミュニケーションの場」ということだとお考えください。レポートで何を書かなきゃいけないのか、私たちは何を重視しているのかっていうことを、今まで、頭の中にある種の思いもあるし、メッセージもあるのだけれども、一人一人に伝える方法が分からなかったわけですね。それを、このルーブリックを使って伝えるということです。授業中にしゃべっても、それは伝わらなかったり、聞いてなかったりします。あるいは、忘れてしまったりします。だけど、評価というのは、学生も、教員も、ものすごくエネルギーと時間を注ぐわけです。だから、そこに一番大事な皆さんのメッセージを盛り込んであげてほしいと思います。

次のメリットとして、大きな課題を処理しやすい課題に分割できる。先ほども言いました「スモールステップ」です。大きな課題ではできない、取り組めない。だから、コピペしたりだとか、ダウンロードしたりっていうことで、ちゃんとレポートを書かない学生がいるわけですが、一つ一つ小さく区切ってあげると処理しやすい。

それから、結果だけではなくて、プロセスの評価もできる。学生の評価と先生の評価を比較できるというお話があります。ルーブリックの話をする、こんな批判を受けます。ルーブリックみたいなものを作るから、自分で評価できない学生を育てるんだ、何でもかんでも手取り足取りやるのは良くないと。しかし、最終目的は全く逆で、学生が自分で評価をできる、そして、自己改善力を付けるっていうのが、ルーブリックの目的です。そのためのヒントというか、ツールなんですね。自分で客観的に自分の文章を読むことができる、そして、そこに朱を入れることができるっていうのは、自立した学習者を育成していくう

えでとても大事な行為でありますので、その辺りの誤解がないように同僚の方にも伝えていただきたいと思います。

先ほど、津田塾の事例でも強調されていましたが、何が望ましい学習なのか、何ができるようになれば、ライティングの力が付いたというふうにみなすのかということを、学生と教員あるいは教員同士で、場合によっては産業界の人も含めて、それを議論するという、このプロセス自体に非常に意味があります。そういうことをこれまであまりされてこなかった。手法ではやってきたかもしれませんが、アクティブ・ラーニングであるとか、いろいろある。しかし、評価に関してそういう議論をしたことはあまりないのではないかと思います。これを繰り返し組織の中でやっていく。つまり、ルーブリックを作成するプロセス、それから共有する、実際に使ってみる、結果を分析するということを、複数の関係者、学内でやることによって、全学だとか、学部だとか、学科という、その組織単位のこれはFDになってくる、あるいは、SDになってくると思います。この点が、ルーブリックのとてもパワフルなツールである理由ですし、ここに真価があるんじゃないかなという気がします。

その意味では、決して、授業でライティング指導をしている教員だけでなく、今日お越しになっているようなライティングセンターのスタッフには、一番、使い勝手がいいツールだと思います。それから、チューターとか、図書館の職員さんとか、TAとか。こういったものがあると、特に非常勤講師の先生とか、新任の先生はすごく便利だし、助かると思います。

こんな話をしていると、いや、実はAO入試とか、推薦入試もかなり曖昧な評価をしているので、そこにも使いたいとか、あるいは、教務系の職員、総務でもそうですけれども、評価に関わっている職員の方は、これがあると評価しやすい、文科省に対しての報告書が書きやすくなるとか、そういったこともあります。管理者の方であれば、部下の人事評価に使えるなど、かなり汎用性のあるツールだと思います。

使用上の留意点というのが幾つかあります。これを作りました、配布しました、それだけでは何も変わらないと思います。まず、学生がこれをしっかり読まなければいけません。ルーブリックというのは、知らない学生からみれば「何でしょう、これは？」っていう話になる。ですから、学習の前に配布してください、課題を課すのと同時に配布をしてください。授業のシラバスと合わせて配るというのも説明しております。求められている能力を後から示すのは、後出しじゃんけんで絶対にやってはいけないことです。学生からすれば、そんな指標があるのだったら、なぜ最初に出さないのっていう不満が必ず出てまいります。配布しただけじゃなくて、先生が説明する、あるいは、例えば、これから4、5名のグループでしっかり読み込んでください、分からない点があったら、お互いに質問し合ってください、それでも分からなかったら、先生に聞いてくださいと、こういう時間がどうしても必要です。

それから、学生と一緒に作ることもできます。これは時間もかかるし、手間も掛かりま

すけれども、非常に学生の記憶に残ります。例えば、どんなものをどういう観点で構成したらいいレポートになるか、皆さんで考えてみましょう。いや、そんなこと、学部生には無理とか、うちの学生には無理と言うかもしれませんが、一回やってみてください。結構厳しい観点を自分たちで作ってきたりします。

それから、返却時の話ですけれども、「プライバシーを守って」。もし、先生がたがこのルーブリックをレポートに添えて返却するのであれば、一番前だと他の学生に見えちゃったりしますので、ホチキスで一番後ろに付けてあげてください。

もし、学生にこのルーブリックをプリントアウトさせるのであれば、それはそれで手間が省けます。そのときに、ぜひ学生に一回はこれでちゃんと評価をしてから提出しなさいと言うと、だいぶ良くなると思います。もし、学生が自己採点を黒でやってきたならば、先生が赤でやってあげると違いが分かりますね。学生があまりにも自己評価が高過ぎるか、低過ぎるっていうことを調整していくことができます。しかも、それも再提出させたりすると、さらにどこが伸びて、どこが伸びていないのかがよく分かるということです。

通常私も学内外でルーブリックのワークショップをやって作っていただくのですが、1回目でパーフェクトなものではできません。先ほど、二つの事例がありましたけれども、恐らく、改訂が3回ぐらい必要だと思います。ただ、3回ぐらいやれば落ち着いてくるということですので、まずは、これでいいかなっていうのを使ってみて、学生からのフィードバックをもらって、修正していくほうがいいかなと思います。

最後は、よくある質問にお答えしていきたいと思います。まず、「ルーブリックが向いてない科目、授業はありますか」。「あります」。今まででもずっと多肢選択テストでやってきましたというような科目ですね。知識の暗記物というのは、わざわざルーブリックを使う必要ありません。点数になりますからね。そういう授業だけをされている大学の先生はあまりいないと思いますけれども、試験対策の授業やっている先生っていうのは向いてないと思います。

それから、「本当に時間の短縮になりますか」。これも疑う先生がいますが、「なります」。ただ、最初の作る時間がかかるということです。それでも、私のワークショップでは、大体2時間でひな形を作ることができますので、学内でぜひ、皆さんがたが中心になってワークショップをやっていただきたいです。まずは2時間あれば一通りできます。修正作業が、またその後、必要になるということですね。ただ、使ってみて分かるんですけど、意外と採点の時間が減らないとすれば、やはり評価基準が曖昧なんです。曖昧な記述をいると、あれ、思った以上に減らないなということがよくあります。それから、もともと、いい加減な評価している人は当然、時間が増えます。

「参考になるルーブリックはありますか」。ということで、先ほどご紹介しました私の訳した本には、大学でのルーブリックが結構入っております。ただ、アメリカの事例ですので、どうもこれ使いにくいと言う人もいるかもしれません。英文で検索すれば、幾つか引っ掛かって出てくるかと思いますが。

私が今、副会長やっております、日本高等教育開発協会という団体がありまして、そこで「ルーブリックバンク」を公開しております。皆さんのお手元にはないかもしれませんが、この JAED、ルーブリックバンクで検索していただくと、まだ数は少ないですが、幾つか保管されておりました、ダウンロードできます。ワードで書かれているものもありますので、それはどうぞ自由に改変していただいて、もう著作権の承諾取っていますので、使っていただいて構いません。そして、皆さんがもし作られたら、またアップしてください。よりよいルーブリックを日本に普及していきたいと思っておりますので、よろしければご協力いただきたいと思います。

それから、「求められることを具体的に表現し過ぎると、自ら考えない学生を育成してしまうのではないか」。これも、先ほど言いましたけれども、今の評価基準は抽象度が高過ぎるのですね。なので、先ほど、「客観的な表現で書かれているかどうか」でも、学生がそれを見て、何が客観的な表現なのか、何が主観的な表現か分らないと、ここで思考が停止して、じゃあ、コピペするかとか、じゃあ、ダウンロードするかとか、そういう話になってしまうわけですね。なので、最終的にはこのルーブリックがなくても、自分で論文書けるような学生を育てるためのツールを作ることです。職場で何かレポートを書けと言われて、大学時代にやったのと、あのとき、観点が五つあったのと、こうやって思い出してもらうといいかなと思うんですね。

これも、ある先生に言われました。書かれていること以上のことをしない学生を育成してしまうから、ルーブリックなんか使ったら、絶対にノーベル賞受賞者なんか育成できない、と怒られました。ノーベル賞を受賞するような学生さんというのは、どうやってつくれるんでしょうかね。私はあまりそれには興味がありません。求めることが高過ぎるんですよ。学生はその先生の授業だけ受けているわけじゃない、たくさんの授業を受けている。その中で、課題に書かれていないことを読み取って、あるいは、課題に書かれていないこと以上のことを期待するっていうのは、過度な負担を学生に強いることになるんですね。だから、もし、先生が求めているのであれば、必ず、それを書いてくださいと申します。18歳の学生に、60歳の教授、学問のプロフェッショナルが考えていることを推測しろというのはかなり酷なことです。もちろんそれに応える学生がいない訳ではありませんが、多くの学生はついていけない。先生がたの頭の中に入っている暗黙知を形式化していくという作業が必要です。これは、意外とやってみると難しいです。先生自身が言語化ができてないんですよ。それを学生に推測させるなんて、ものすごくそれはハードルの高いことを要求しているっていうことですね。

それから、この原著の Dannelle 先生の本に書かれていますが、彼女は心理学の教授でもあり、多文化教育、異文化教育の先生でもあります。アメリカではやはり、学力とか学習意欲の格差を考えた場合、民族的なマイノリティーだとか、それからファーストジェネレーションって言いますけれども、世代で初めて大学に来る学生さんたちが、やはり不利になっているということが明らかになっています。

例えば、皆さんが客観的な文章を書くようにというふうに、口頭で伝えたとします。それを聞いた学生が家に帰ります。Aさんはお父さん、お母さんも大卒、場合によってはお父さんが大学教授です。お兄さん、お姉さんも当然、大学へ行っています。そういう家庭に生まれたら、「客観的な文章って何？ お父さん教えて」って言うと、「ああ、それはこういうことだよ」と教えてくれるわけです。一方、Bさんは、お父さん、お母さんとも高校しか出てない。お兄ちゃん、お姉さんも専門学校卒だとする。客観的な文章の書き方を習っていないわけです。家で聞くと、「そんなの分からないし、大学の先生に聞け」、みたいな話になるかもしれません。

だから、皆さんがたが暗黙知を形式化しないで、口頭だけで伝えたとか、考えろなどと言うと、教室の中のそういう文化格差を助長していることになるのです。できない学生に不利なことを皆さんが言っている可能性があるのです。

先ほど、津田塾の事例で、英文の指導方法がありましたけれど、やはりアメリカにはいろんな人がいるので、そういう意味での不公平感があってはいけないということで、文章ルール of 可視化、書き方に関してのルールを作ってずっと取り組んできたということなんです。ハイコンテクストの文化圏である日本は、それをやってこなかったんだと思います。日本語のライティングの指導がすごく難しいのは、教える側が言語化してこなかったからです。大学間の共同でそれを作ろうとしているのは大変素晴らしいことだと思います。学生のためになること、教室の中での公平性という意味でもとても大事だと思います。

次の「評価疲れ」の話もよく出てきますね。良き評価は人を育てます。評価って何のためかって、やはり人を育てるための評価です。ですから、それを学生にも伝えなきゃいけないと思います。なんで、ルーブリックをわざわざ使うのか。やはり使うことによって、自分の能力も伸びるし、相互評価のときにも使うというのも、友達の能力を上げるためのピア評価ですね。それを伝えなければいけないと思います。

「学内でどんなふうに普及していけばいいのでしょうか」ということですが、ぜひ、共通教育科目、教養教育でルーブリックを普及していただくといいのではないかと思います。あるいは、全学のカリキュラムレベルでの評価のためにも使うと、私の授業でもこれだったら使えるということを実感してもらえないかなと思います。ルーブリックバンクは先ほど、全国版の話をしましたけど、ぜひ、学内でそれを作られるといい。一番使い勝手のいいルーブリックの見本っていうのは学内の先生が作ったものです。学生が同じですからね。

最後に。「おまえは文科省の手先か」とか言われますけれども、まったく逆ですね。今後は、ディプロマポリシーとか、学部のカリキュラムポリシーとか、外部評価の基準みたいなものがバンバン出てくるはず。産業界や他国の団体からもいろんなことを言うと思いますが、自分たちで軸を持っていないと、つまり、暗黙知だけで、私の頭の中に評価軸はありますということだと、そういった外部からの評価軸にやられちゃうんですよ。貴学の基準は曖昧ですね、だったらこれを使いなさいと言われてしまいます。その力に負

けてしまうんですね。なので、皆さん一人一人が、ご自身でしっかりと私なりの教育をしたいとか、学科としてこういう教育をしたいとか、今日ですと、ライティング指導は私たちがきちんとしていたいというふうに思うのであれば、自分たちでルーブリックを作らなくてはいいけない。それが自立した組織、大学であるためには必要なことですし、外部評価のさまざまな攻撃から身を守る方法でもある。そういうことで、私は何と言われてもいいですけども、思っているところはちょっと違うということです。

CM をして、私のパートは終わります。今日、お話ししているような内容を学内で普及していくときに、E ラーニングの教材を使って多くの先生にご覧いただくっていうことも、一つ方法かなと思います。私も関与している e ラーニング教材があります。個人で買うにはちょっと高い値段ですが、組織で複数の先生で利用するというのであれば、こういう方法もあるのではないかと思います。YouTube でサンプルビデオもご覧いただけます。「大学で教えるためのルーブリック入門」と検索をいただければと思います。

ということで、今日は特にワークとかはしませんが、ぜひ、ご自身でお考えいただきたいことは、まず、このルーブリック、どうでしょうか、使えそうかどうかということです。いろいろ疑問点もあるかと思いますが、それはまた後ほど、ディスカッションがありますので、遠慮なく、津田塾の皆さんも、関西大学さんの皆さんのほうでも、お寄せいただければと思います。それと、やはり 1 人で使って、採点時間が楽になった、だけではもったいないですね。だから、同僚の方とぜひ、共有していただきたいと思っておりますが、そのために一回、皆さんや、あるいは学部、学科、大学で何をしたらいいのかっていうことも併せてお考えになられると、このルーブリックの魅力をもっと引き出す、パワフルなツールになるのではないかなと思います。では、私の報告はこれで終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

*佐藤先生のご指示により、当日使用した発表用資料は掲載しておりません。